

【注意】 答えはすべて、(その8)の「解答らん」に書き入れなさい。本文中の句読点や記号はすべて一字と数えます。

一次の文章は内田樹の評論『先生はえらい』の一部である。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、出題に際して本文には表記を一部変えたところがある。

コミュニケーションというのは、要するに、何かと何かを取り替えることです。そして、何かと何かを取り替えたいという欲望がもつとも※<sup>こうしん</sup>亢進するのは、そこで取り替えられつつあるものの意味や価値がよくわからないときなのです。だって、「わかる」とそれ以上コミュニケーションを続ける意欲が失われてしまいますからね。人間同士のコミュニケーションはいつだってそうです。

「もう、わかったよ」とか「だから、その話は、もう聞いたつてば」というのは、「私はあなたの言いたいことをたいへんよく理解しました。ピース」というようなIなメッセージではありません。どちらかというと「わかったから、黙れ」というコミュニケーションの打ち切りを意図する信号ですね。私たちが会話においていちばんうれしく感じるのは、「もつと話を聞かせて。あなたのことが知りたいから」という促しです。でも、これって要するに、「あなたが何を言っているのか、まだよくわからない」ということでしょうか？ 私たちが話をしている相手からいちばん聞きたいことばは「もうわかった（から黙っていいよ）」じゃなくて、「まだわからない（からもつと言つて）」なんですね。恋人に向かって「キミのことをもつと理解したい」というのは愛の始まりを告げることばです。けれど、「あなたって人が、よくわかったわ」というのはたいてい別れのときに言うことばです。

ごらんの通り、コミュニケーションを駆動しているのは、たしかに「理解し合いたい」という欲望なのです。でも、対話は理解に達すると終わってしまう。だから、「理解し合いたいけれど、理解に達するのはできるだけ先延ばしにしたい」という矛盾した欲望を私たちは抱いているのです。

対話へと私たちを駆り立てるのはその欲望です。理解を望みながら、理解に達することができないというA宙づり状態をできるだけ延長すること、それを私たちは望んでいるのです。対話の相手がこちらの話を聞いて、いかにも「そんなの全部分かってるよ」とB氣ぜわしくなずかされると、ちよつとむつとしますね。

でも、それって考えると、変でしょう？

1相手に「君が言いたいことはわかった」と言われると、人間は不愉快になるんです。

メッセージの正確な授受ということがコミュニケーションの真の目的だとしたら、メッセージが正確に受け渡しされたときに不愉快になるといえるのはおかしいですね。

ということばは、もしかするとコミュニケーションの目的はメッセージの正確な授受じゃないのではないか……という疑問が湧いてきます。コミュニケーションの目的は、メッセージの正確な授受ではなくて、メッセージをやりとりすることそれ自体ではないのでしょうか？ だからこそ、コミュニケーションにおいては、意思の疎通が簡単に成就しないように、いろいろと仕掛けがしてあるのではないのでしょうか？ そうすれば、コミュニケーションがどんどん延長されますから。

コミュニケーションにおいて意思の疎通が簡単に成就しないように、いろいろ仕掛けがしてあるって、どういうことでしょう。

ふつう、コミュニケーションが円滑に進行するようにあれこれと工夫をするということは聞きますけれど、コミュニケーションがうまくゆかないように工夫するというのは、ちよつと話がおかしいですね。

でも、そうなんです。

2「あべこべことば」って知ってますか？ 私が勝手につくった造語ですから、知らなくて当然ですけど、それがどういうものかは例を挙げれば、すぐにわかります。例えば、「適当」というのは、どういう意味でしょう？ 「適当な答えを記せ」という場合は、「ぴたりと適切な」という意味ですね。でも、「あいつは適当なやつだ」とか「適当にやつといて」という場合は、むしろ「ぴたりと決まらないで、ポイントが多少ずれている」という意味ですね。

これ、変じゃありませんか？

でも、これは日本語だけじゃないんです。古今東西世界中のどんな言語にも、まったく正反対の意味をもつ語というのがあります。それも、日常的によく使う語に。同一の語が正反対の意味を持つことがあるというのは、理屈からすると、どうも不便でいけません。誤解を生じやすいですから。

じゃあ、逆に、そういう「あべこべことば」を持つことで、どういいういいことがあるか、それを考えてみましょう。とりあえず、相手の話を注意深く聴くようになる、ということ、これはたしかです。a、コミュニケーションにおいて、決して誤解が生じないように一義的で正確なことばづかいが可能であるとしたら、私たちはコミュニケーションに際して、それほど集中力を必要としなくなります。コミュニケーションに際して、それほど集中力がなくても、相手が言いたいことが、すらすらとわかってしまう。なんだか楽ち

んそうですけど、それって、そんなにいいことなんですか？ ずいぶんひねくれた考え方のように聞こえるかも知れませんが、こういう問いを受け止めることはたまには必要です。おそらくコミュニケーションはつねに誤解の余地があるように **II** されているのです。うっかり聞き間違えると、けっこう深刻な影響<sup>えいきやう</sup>が出るように、ことばはわざとわかりにくく出来上がっているのです。でも、どうして？

「わかる」ことは、コミュニケーションを閉じる危険とつねに背中あわせです。

私たちが話をしていて、つまらない相手というのがいますね。こちらの話をぜんぜん聴いていない人です。なんで私の話を聴いてくれないかという、先方にはこちらの言うことが全部わかってからです（少なくともご本人はそう思っているからです）。その人にとっては、私は「いなくてもいい人間」なんです。だって、私の話はもうわかったから。「君の言いたいことはわかった」というのは、ですから「私の目の前から消えろ」という私の存在そのものを否定する遂行的なメッセージをも **C** 言外に発していることになりました。 **b**、私たちは「もう、わかったよ」と言われると傷つくのです。

聴き手に何の興味も示さないで熱く語り続ける語り手も、聴き手の存在を否定するメッセージを発信しているという点においては変わりません。そういう人の話を聴かされると、私たちは弱い酸<sup>おか</sup>に侵されるように、深いところで傷つけられます。 **c**、式典に来賓で来ている市会議員の挨拶<sup>あいさつ</sup>みたいなものが、その典型です。そういうものを聴かされると人間は苦痛を感じます。

これは苦痛を感じるのが、人間として正しい反応なんです。 **3** こういう話が私たちに苦痛を与えるのは、そこでもやはり「扉」が閉じられているからです。「扉が閉じられたことば」というのは、先ほども書いたとおり、聴き手に向かって、「あなたはいなくてもいい」と告げることばのことです。「あなたが私の話の内容を理解しようと理解しまいと、あなたがいいよ」といまいと、私は今と同じことを言うだろう」と告げられて傷つかない人はいません。

私たちを傷つけ損<sup>そと</sup>なうコミュニケーションがどういうものがわかると、それをひっくり返すと、私たちが **※** 愉悦<sup>ゆえつ</sup>を感じ、生きていく実感が湧いてくるコミュニケーションがどういうものであるかもわかります。私たちが聴いて気分がよくなることばというのはいくつかの種類がありますが、そのすべてに共通するのは（誤解を招く表現ですが）、そこに誤解の余地が残されているということです。奇妙<sup>きまよう</sup>に聞こえるでしょう？

でも、誤解の余地なく理解が行き届いたコミュニケーションではなく、誤解の余地が確保されているコミュニケーションこそが、私たちにコミュニケーションをしている実感をもたらししてくれるのです。

十代の若い人たちは、非常に会話の語彙<sup>ごい</sup>が貧困です。これは、みなさんも認めてくれると思います。「むかつく」とか「うざい」とか「きもい」とか「かわいい」とか、ほんとうに十個くらいの単語だけで延々と会話をしている女子高校生などを電車の中でみかけます。ふつうの大人の人は、そういうのを横で聴いて「近頃の若いもんは、なんという貧しいボキャブラリーで意思疎通を行っているのだろう。あんなことでちゃんとしたコミュニケーションが成立しているのだろうか」と苦々しい顔をしたりします。まったく、おとしやる通りです。あれじゃ、意思疎通はできっこありませんね。

洋服を見ても「かわいい」、化粧<sup>けしょう</sup>を見ても「かわいい」、音楽を聴いても「かわいい」。あれでは、そのような形容詞を交<sup>か</sup>合<sup>あ</sup>っているもの同士でも、何を言っているのかお互いの心の中がわかっているとはとても思われません。「かわいい」のが洋服の色について言われているのか、デザインについて言われているのか、ボタン穴<sup>びんやう</sup>の微妙な位置関係について言われているのか、 **※** スリットの角度について言われているのか、「これ、かわいいね」「うん、かわいいね」だけじゃ、わかりっこありません。

……ほらね。ちゃんと、若い人たちだって、わざと誤解の幅<sup>はば</sup>があるように、コミュニケーションしているでしょう？

それこそがコミュニケーションの「王道」だからです。形容詞十個だけのチョー貧しいコミュニケーションでは、お互いに「何を言っているのか、よくわからない」。だから、聴く人間をつねに「不確かで曖昧<sup>あいまい</sup>な位置」にとどめおくことができる。それゆえに、 **4** これらの会話はコミュニケーションとして成立しているんです。

※ 亢進する…感情などが高ぶっていく。

※ 愉悦…楽しみ、喜ぶこと。

※ スリット…洋服のすそやそで口<sup>くち</sup>にほどこす切りこみ。

## 国語 (その2)

問一

I

II

に入る言葉として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- |    |     |   |     |   |     |   |     |   |     |
|----|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|
| I  | 感覚的 | イ | 感情的 | ウ | 友好的 | エ | 道徳的 | オ | 表面的 |
| II | 差別化 | イ | 構造化 | ウ | 単純化 | エ | 効率化 | オ | 理想化 |

A 宙づり状態  
ア 危険な状態

イ バランスが取れた状態  
エ ちゅうとはんば 中途半端な状態

イ しつこく、何度も何度も  
エ わかったような顔で、偉えらそうに

イ 言葉では直接表現しないで  
エ 言葉だけでなく態度でも表して

ア a おそらく  
b だから  
c あるいは  
イ a おそらく  
b しかも  
c たとえば

問四——線1「相手に『君が言いたいことはわかった』と言われると、人間は不愉快になるんです」とあるが、「不愉快になる」

のはなぜか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

「理解し合いたい」というお互いの欲望が私たちを対話に駆り立てているのに、相手から「わかった」と物知り顔で言われると、対等な立場でのコミュニケーションが成立しなくなるから。

エ  
メッセージのやりとりを楽しむためにゆつくり話しているのに、コミュニケーションの途中で「わかった」と言われると、  
せつかくの自分の気遣いきづかを無視されたように感じてしまうから。

問五 — 線2「あべこべことば」とあるが、本文中で説明されている「あべこべことば」にあたるものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

「結構だ」という言葉は「いらぬ・必要ない」という意味で使われる時と、「よろしい・申し分ない」という意味で使われる時がある。

エ 「矛盾」という言葉は武器としての「矛」と「盾」という本来の意味が変化し、二つのものが論理的に整合しないこと」の意味で使われるようになった。

問六——線3「こういう話が私たちに苦痛を与える」とあるが、それはどういうことか。50字以上70字以内で説明しなさい。

問七——線4「これらの会話はコミュニケーションとして成立しているんです」とあるが、現代の若者の会話がコミュニケーションとして成立しているのはなぜか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 簡単でわかりやすい十個くらいの単語だけをもちいて、自分の考えができるだけ速く伝わるように心がけることによって、気分がよい対話になっているから。

イ 語彙が貧困なため意思の疎通まで時間はかかるが、大人には理解できない曖昧な若者言葉を使うことによって、仲間同士の親密な対話が続いているから。

ウ ボキャブラリーは貧困でも、自分の気持ちや好き嫌いを簡潔にわかりやすく表現できる言葉を多用することによって、対話がスムーズに進んでいるから。

エ 「これ、かわいいね」と言われたら「うん、かわいいね」とすぐに答えるように、常に相手に同意することを心がけることによって、対話が途切れずに続いているから。

オ 誤解の余地が確保されている言葉を使うことによって、はっきりとした意思の疎通がなかなかできないため、結果的に対話が長く続いているから。

二次の文章は柳月美智子の小説『十二歳』の一部である。小学校六年生の「私(さえ)」と「みどり」は、木成きなり小学校のポートボールチーム「オール木成」に入ることになった。「やさお」は顧問兼コーチのあだ名である。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、出題に際して本文には表記を一部変えたところがある。

オール木成に入ったということで、私はピアノをやめることにした。毎週火曜日の四時からレッスンだったが、オール木成の練習は毎日六時ごろまであるから行けなくなったのだ。

でもそれは、ただお母さんを納得させるための言い訳だ。オール木成の中でも習い事をしている子は何人もいる。やさおに言って、決まった時間に帰る子もいるし、休日に曜日変更へんこうした子もいる。

だからオール木成に入ったことと、習い事をやめるということは、イコールではない。でも、初めのミーティングのときに、やさおはこう言った。

「練習は必ず出ること。病気、けが以外での欠席は原則的に認めない」

実際このひとことで何人かは習い事をやめた。お母さんたちも、学校の行事ということで、案外簡単に習い事をやめさせてくれたみたいだった。そう、大人なんて結局なんだっていいのだ。学校から帰ってきて、すぐにテレビを観たりゲームをしたりしないで、ためになる「何か」をしていれば満足なのだ。

私はこれが、<sup>1</sup>絶対のチャンスとばかりにオール木成のことを持ち出して、ピアノをやめることを堂々と言った。するとお母さんは、<sup>A</sup>拍子ひょうし抜けするくらいあっけなく了承りようしょうしてくれた。こんなだったらもっと早く言えばよかった、と後悔こうかいしたくらいだ。

私はピアノが大きらいだった。ピアノというより、ピアノの練習がいやでいやでしかたなかった。月曜の夜のあのあせり。あの感じ。でもどうしても練習をする気になれないもどかしさ。

私はみどりちゃんのことを考える。みどりちゃんと私は、同じピアノ教室に通っていて、その教室で春に発表会があった。市内の同じ系列のピアノ教室の生徒が集まって、地元の文化会館で行われた小さいものだったけど、私は<sup>B</sup>案の定「練習をする」というセンスがまったくなく、いつまでたっても上達しなかった。私の弾く曲は、十分実力の範囲内の曲はんいだったし、時間は十分すぎるほどあった。にもかかわらず、いつまでたってもちつとも上達しない私に、先生はあきれかえりながら、最終手段として「補習」という、思いもかけなかったとんでもない隠し技かくを提示してきた。

火曜日のレッスン日以外に、なんと日曜日まで特別にレッスンするというのだ。もちろん、発表会までの期間限定だし、これは先生の好意であって無理に行かなくてもいいのだけれど、わざわざ先生が自分の時間を割いてまで教えてくれるというのに、行かないわけにはいかなかった。お母さんは先生に、申し訳ない、はづかしい、感謝します、と<sup>a</sup>頭を下げた。

でも、<sup>2</sup>私は腹立たしかった。せつかくの休みにレッスンに行くなんて、まったくばかかっている。本番になればどうにかなるし、今までの経験からすると、きっと私は三日くらい前から猛練習もうしんをして、なんとか弾けるようになるはずなのだ。

それにこの補習は私のためじゃない。本番で先生が恥はじをかかないための補習レッスンだと思えなかった。

私はしぶしぶとレッスンに行き、うんざりしながらみどりちゃんに、そのことを告げた。みどりちゃんは、同情とも哀れみともつかない変な表情をして、

「大変だね」

とひとことだけ言った。

しかし、それからしばらくたったある日、みどりちゃんは私に、  
「うらやましいよ」

と **b** 言ったのだ。

「えっ、何が」

「ピアノ。レッスン日以外にも、先生から教えてもらえるなんていいなあ……」

私は自分の耳を疑った。

「なんで？　なんでなんで。だって無理やりやらされてるんだよ。あまりにも下手だから、しょうがないからやってるんだよ。先生だって本当はイヤイヤなんだよ」

「ううん、ちがうよ。さえちゃんには上手になってもらいたいんだよ。期待してるの、先生は。発表会でうまく弾けるようになって」

「ちがう。絶対にちがうよ。ねえ、みどりちゃん、ほんとにそんなじゃないんだよ」

「ううん、お母さんも言ってた。あんたも頼んで教えてもらいなさいって……」

そんなじゃないのに……どうして……。私はこのとき本当に、**3** **す** すごい衝撃を受けた。

みどりちゃんは、みどりちゃんの実力より少し上のランクの曲を発表会で弾く。それは、みどりちゃんならできると先生が確信したからで、補習をしないのは、そんな余計なことをしなくても、みどりちゃんはきちんと家で練習してきて、完璧に弾けるのがわかってるから。

それなのに、なんでなんだろう。うらやましいなんて。人によってこんなに受けとめ方がちがうなんて。それはとても怖いことで、私はその日みどりちゃんに言われたことが、頭から離れなかった。自分がこうだと思っていたことが、ほかの人にとってはまったく別の意味を持つ。怖いと思った。ものすごい恐怖だった。

みどりちゃんも、今月でレッスンをやめる。私は火曜日のレッスンがなくなり、課題を与えられなくなったことで、これからはもうピアノを弾かなくなるだろう。でも、みどりちゃんはレッスンをやめたあとも、ずっとピアノを弾き続けることだろう。自分ですずんで譜面を買ってきて、それができるようになるまで何度も練習をするだろう。

発表会当日、私は自信のなさのために、少しばかりテンポを速く弾きすぎてしまったけれど、それ以外はけっこううまくできた。先生もほっとした様子で、笑顔を見せてくれた。

でも、練習では完璧だったみどりちゃんが、本番で二回もミスってしまったのだ。みどりちゃんはそれでも **c** していたけど、心の中ではきつと残念に思っていたと思う。

それとも、私に対して「ほらね、さえちゃんは補習をしたから上手に弾けたでしょ。私は教えてもらえなかったからまちがえて当然なの」と思っていたのかもしれない。そう考えるとうんと悲しかったけど、終わってから「ほっとしたねー」となんのふくみもない晴れ晴れした笑顔で言われて、私はそんなふうに意地悪く思ってしまった自分を呪った。

先生は、※おとりのみどりちゃんのまさかのミスに顔をしかめていて、私は「本当に大人は **4** 余計なことをする」と補習のことを思い、「だからこんなことになる」と少し残酷な気持ちで先生のゆがんだ顔を遠くから眺めていたのだった。

ピアノを最初に習いたいと言い出したのは自分だった。先にお姉ちゃんが習っていて、それはとてもたのしそうで気持ちよさそうで、私はお母さんをお願いして、二年生のときからピアノを習いはじめた。

「さえは、本当に飽きっぽいわね……」

台所でお姉ちゃんの結婚行進曲を遠くにききながら、お母さんが言った。

「……別にいいじゃん」

何も言いかえせない自分を、私がいちばんよく知っていた。私は本当に飽きっぽいのだ。なんでもすぐに手を出すくせに、あつというまにやめてしまう。そろばんもスイミングも。

ある程度できるまでは一生懸命やるけれど、なんとなくできるようになると、もうなんだかどうでもよくなってしまふのだ。

私はピアノのある部屋に行つて、お姉ちゃんの軽やかな指先を見つめた。高校一年のお姉ちゃんは、私よりも背が低い。私の身長は去年の夏、驚くべきスピードでぐんと伸びて（夜寝ていて、背骨が伸びる音がきこえたくらいだ）あつというまにお姉ちゃんを追いこした。

「何よ、あんたも弾くの？」

一曲弾き終えたお姉ちゃんが、振りかえつて言った。

「ううん。ねえ、もう一回弾いて。今のやつ」

お姉ちゃんは、右の眉毛をちよつとだけ持ちあげてから、いいわよと言って姿勢を正し、

d

座り直した。

たたたたーん、たたたたーん、  
たたたたたたた、たたたたた、たたたたた、たたたたた、  
じゃーんじゃじゃじゃじゃじゃじゃ、じゃーじゃらんらんらん。

丸くて赤ちゃんのようにもちもちとしたお姉ちゃんの小さな手は、あっちに行ったりこっちに来たりして軽快に動く。私の目は釘づけで、すごいなあただそれだけ思う。

だって、お姉ちゃんの紅葉みたいな手は、一オクターブ届か届かないかのぎりぎりの大きさしかないのだ。それなのにこんなに鍵盤が離れている和音いっぱい曲を、簡単に弾いてしまう。

私の指はお姉ちゃんよりうんと長いし、一オクターブ以上（下から次のレまで）軽く届く。初めてのレッスンのときに、「この子は将来、必ず私よりうまくなります」と、先生に言われたほどの指なのだ。

それなのに、私にこの曲は弾けない。技術的にはもちろんだけど、そうじゃなくてほかの何か。なんて言えばいいのかわからないけど、私には絶対弾けないのだ、きっと、一生。

お姉ちゃんはピアノを弾くときだけ指がすつと長くなるし、私はピアノを弾くときだけびたりと指が縮こまる。つまりは、そういうことだ。5

そういうことが、世の中には案外と存在するのだ。私はそのことにたつた今気づいた気がして、そしてそれを意外にもすんなりと納得している自分に、ちよつぴりがっかりしたのだ。た。

※おひとり…ここでは最後に演奏する人の意味。

問一——線A「拍子抜けする」・B「案の定」の意味にふさわしい場面として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

A 拍子抜けする

A 窓の外をぼんやり見ていたら、後ろから急に声をかけられたのでびっくりしてしまった。

I 遅刻をしてきた理由をいくら聞こうとしても、彼女は決して語ろうとはしなかった。

U 不注意による失敗を罰せられると覚悟していたが、型どおりの注意を受けただけですんだ。

E 目的の町に昼過ぎには着くと思っただのに、夕方になっても着けず、彼はあせり始めた。

オ 足に自信がなかった弟だが、毎日走る練習をしたので、運動会で一位をとることができた。

B 案の定

A 夏休みに書いた読書感想文が意外にも優秀賞に選ばれたので、驚いてしまった。

I 後ろ姿だけしか見えなかったが、もしかしたら、あれは先生だったかもしれない。

U おじさんは犬と散歩する時、いつも同じ時間に同じ道を歩くことに決めているらしい。

E 冬の寒さがきびしかったわりには、今年の桜はいつもより開花が早いようだ。

オ 日ごろから落ち着きがなく、よく失敗をする彼が、やはり今回もミスをおかした。

問二

a d に入る言葉として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、記号は一度だけしか使えないものとする。

A 堂々と I ポツリと U 深々と E きちんと

問三——線1「絶好のチャンス」とあるが、「私」がそう思ったのはなぜか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

A ピアノをやめたいと前から言っていたが、オール木成の練習とピアノのレッスンが重なると分かれば、お母さんもピアノを続けるのは無理だと認めてくれるにちがいないと思ったから。

I ピアノをやめる決心がつかなかったが、オール木成の練習を優先させるためにみんなが習い事をやめているので、お母さんにピアノをやめるように勧められるだろうと思ったから。

U ピアノをやめたいとずっと思っていたが、オール木成の練習は学校行事で、ピアノより大事だとやさおに言われたので、お母さんも簡単にピアノをやめていいと思うだろうと思ったから。

エ ピアノをやめたいと思っていたが、オール木成の練習は学校行事であり、それで習い事をやめた子もいたので、お母さんにこれを機会にピアノをやめる話を切り出せると思ったから。

オ ピアノがきらいでやめたいと思っていたが、オール木成の練習が始まることを機会に自分のその気持ちを伝えれば、お母さんもピアノをやめていいと言ってくれると思ったから。

問四 — 線2 「私は腹立たしかった」とあるが、それはなぜか。その理由を、本文中の言葉を用いて80字以内で答えなさい。

問五 — 線3 「すごい衝撃を受けた」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「私」は、先生が上達しない「私」のことをきらいだから補習をさせると思っていたのに、みどりちゃんは、先生は「私」のことが好きでもつと上手にさせたくて補習をするのだと意外なことを言ったから。

イ 「私」は、やりたくもない補習を先生の都合でやらされると思っていたのに、みどりちゃんは、先生が「私」に期待をかけるから補習をするのだと思ってもみなかったことを考えていたから。

ウ 「私」は、先生が練習不足であることを「私」に分からせるために補習をしていると思っていたのに、みどりちゃんは、不思議なことに「私」の演奏を練習不足だとは少しも感じていなかったから。

エ 「私」は、やりたくもない補習をさせられていることに同情してもらえると思っていたのに、みどりちゃんは、先生に補習をしてもらえないことが悔しくてたまらないと驚くようなことを思っていたから。

オ 「私」は、先生が実力のない人にだけ仕方なく補習をするのだと思っていたのに、みどりちゃんは、発表会前の補習は全員に公平にするべきだと信じられないようなことを考えていたから。

問六 — 線4 「余計なこと」とあるが、ここで「私」が「補習」を「余計なこと」と思ったのはなぜか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「私」が、本番での「私」の成功とみどりちゃんの失敗について、補習を受けた受けないに関係があるのではないかと、なやんでしまったから。

イ みどりちゃんが、本番で失敗したのは補習を受けたいと先生に頼まなかったからだと思いこみ、後悔をかくしきれなくなってしまったから。

ウ 「私」が、一人では練習もできなかったのに本番で上手に弾けたのは補習のおかげだと、思わず先生に恩を感じてしまったから。

エ みどりちゃんが、自分は補習を受けなかったせいで本番に失敗したと悲しみ、そのために「私」が責任を感じてしまったから。

オ 「私」が本番で成功し、補習を受けなかったみどりちゃんが失敗したために、二人の間に心のすれ違いが生まれてしまったから。

問七 — 線5 「そういうことが、世の中には案外と存在するのだ」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 才能というものは環境にめぐまれた人は生かすことができるが、同じ才能を持っていても環境が整わない人には生かせない、ということが世の中の常識だということ。

イ 努力さえすればだれでも才能を伸ばすことができるが、努力をしない人はせっかく才能があっても伸ばすことはできない、ということを経世の中のだれもが知っているということ。

ウ 自分の才能に気づける人は技術をみがけるが、自分の才能に気づけない人はどれだけたっても技術をみがけない、ということが世の中一般にはよくあるということ。

エ 才能がなくても知識があれば何でも上達するが、才能があっても知識がなければ上達しないままに終わってしまう、ということが世の中にはかなりあるということ。

オ 才能のある人は悪条件があっても上達することができが、才能のない人は良い条件があっても上達することはできない、ということが世の中には思いの外あるということ。

### 三 次の各文の——線のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 周囲の人々のジモクをひく。 ② セーターをアむ。 ③ 乗越し運賃をセイサンする。 ④ バスがコンザツする。
- ⑤ 日本列島をジュウダンする。 ⑥ 敵をダハする。 ⑦ チームをタバねる。 ⑧ シュクジを述べる。

\*

\*

|   |   |   |   |
|---|---|---|---|
| * |   |   |   |
| * | * | * | * |

[illegible]

|   |   |   |
|---|---|---|
| * |   |   |
| * | * | * |

[illegible]

|        |   |
|--------|---|
| ⑤      | ① |
|        |   |
| ⑥      | ② |
|        | む |
| ⑦      | ③ |
| ね<br>る |   |
| ⑧      | ④ |
|        |   |